

## 第 1 回静岡県緑化推進計画策定有識者会議意見対応表

項目	意見	対応
計画目標	計画が目指す緑化の具体的なイメージはあるのか？	今後作成していく。
県内産苗の使用	使用する花は地元産のもので。緑化活動は地元の産業とつながっていることが重要。	緑化活動に、県内産苗の利用を図っていく。 【1(1)ア】
地域で育てて地域で植える	よそから持ってきたものを使うのではなく、自分たちの手で育てたものを植えると、地域循環の花苗の活用を考えるべき。地元で苗の生産から行えば、地域での緑化意識醸成にもつながる。配布においては、毎年同じものを一律配るのではなく、宿根草を入れる、種類を変える等の工夫が必要。配布するだけの事業はやめたほうが良い。	グリーンバンクで実施している定期配布事業を見直し、県内産苗の活用を図っていく。 地元のほ場で種から花苗を育て、それらを花壇に利用する活動を推進していく。 【1(1)ア、1(1)イ】
将来の担い手の育成	小学生を対象とした次世代の育成には、育種交配など、自分で育てたものが変化していく過程を見せ、夢を持たせる実体験が必要。緑化推進や技術者といった将来の担い手を育てていく。	小学校での緑化活動の支援を検討していく。 【1(1)ウ】
里山モデル	里山を知らない世代に残してほしい。林齢に段階がある里山を整備し、生物多様性を学ぶ機会と組み合わせ、里山モデルを提案したい。	環境保全、農地保全の両面から、里山保全も進め、学びの場としても活用していく。 【1(1)エ】
郷土種の利用	本来の景観にあった地元の植生が失われつつある。地元で愛された植物を地元で育てそれを次世代につなげる、そういうストーリーが必要。	地元で育てた花苗を活用するしくみをつくる。 里山の保全に努める。 【1(1)イ、1(1)エ】
景観配慮 地域の特性にあわせた景観	地域の個性に合わせた緑化推進、周囲の景観と調和した街路樹や植栽のあり方。それぞれのエリアで自分たちの自慢できる景観があることが重要。五感で楽しめる花と緑を提案したい。	都市部、住宅地、里地・里山、森林部とそれぞれのエリアに調和した緑化を推進していく。 【1(1)エ、1(1)オ、1(1)カ、1(1)キ、2(3)イ】
芝生コーディネーターの育成	芝生を全県に普及するためには、専門性を持ったトータルプロデューサーがほしい。	地域ニーズに応じられる芝生アドバイザーの育成を図る。また、身近で使いやすい芝生の普及を進める。 【1(2)ア、1(2)イ、1(2)ウ、1(2)エ、】
おもてなし空間の整備	おもてなし空間は選択と集中で作っていく。併せて、その後のしくみも考えておく。今ある民間をどう取り込むか、考える。	おもてなし空間の整備において、行政、地元、花き供給業者の協議会を作ることを要件とするなど、地元の個性を出す仕組みとその後の仕組みを考えた方法で取り組んでいく。 【2(3)ア】
地域の特徴を捉えたおもてなし空間	おもてなし空間はどこも同じではなく、地域ごとに違ったものがある。ストーリー性を大事に、どこでもやれるものではなく、地域の特色を出せるといい。みんなが参加できるような仕掛け。宿根草やハーブも使う。インスタ映えするような。	

民間との連携	産業とのつながりをつくる。延長線上にある商店街など私有地との連携。将来的にはNEXCOやJR、伊豆急行とも協力をしていく。	官民連携の緑化づくりを進める。 【2(4)ウ】
旅行業界との連携	旅行業界などからも意見をもらおうといい。ネモフィラやコキアの庭園には有料でも1万人の集客があった。	旅行業界と連携し、魅力ある花と緑の空間のPRをしていく。 【2(4)ア、2(4)イ】
コンクールの実施	花緑コンクールをもっとイベントして広げる。オープンガーデンでたくさんの人に見てもらう。	花・緑コンクールの顕彰制度の周知を図り、地域住民の自発的な緑化の活性化に取り組んでいく。 【2(4)ウ】
多様な価値観の共存	新しい価値観を持った人たちと花の会のような従来の人たちが共存できる社会。お互いの価値観を認め合う関係性がほしい。	新たな担い手の発掘を行い、従来の担い手と共存する緑化活動の取組みを進めていく。 【3(5)ア】
関係部局との連携	学校現場から見ると、教育委員会と緑化の課は情報の共有が図られていない。学校地域支援本部など保護者と地域が協力して学校を創り上げていこうとする組織がある。	緑化担当課と各部局を構成員とする緑化推進会議を活用し、情報の共有を図っていく。 【3(5)イ】
緑化活動の拡大	SNSなどを活用し、情報の拡散を図る。緑化活動とイベント、アクティビティとつないで、新たな参加者へ働きかけを行う。	緑化ボランティア活動を他のイベントと組み合わせ、新たな層の参加を促進していく。 【3(5)エ】
緑化コーディネーターの必要性	コーディネーターの必要性。緑化のプロをどう巻き込んでいくか、どこに足りなくて、どこに必要とされているのかを理解し、組織を動かす力が必要。	これまでのグリーンバンクの研修体系を見直し、地域の緑化活動の核となる緑化コーディネーターを育成し、活用していく。 【3(6)ア、3(6)イ】
緑化コーディネーターの育成	コーディネーターを育て、地域の公園など実際の活動の場も与える。自分が地域に役に立つことが学ぶ楽しさにつながる。頭立つ人間が重要。ターゲットは子どもと一緒に何かをしてくれる世代。	これまでのグリーンバンクの研修体系を見直し、地域の緑化活動の核となる緑化コーディネーターを育成し、活用していく。 【3(6)ア、3(6)イ】
緑化コーディネーターの活用	コミュニティの中で、苗作りや植え付けなどを行い、自分が育てたものに愛着を持てるようなしくみを作る。そのためにも優秀な講師・コーディネーターが必要。	地域の緑化活動の核となる緑化コーディネーターを育成し、地域で育てた苗の活用の仕組みの普及を図っていく。 【1(1)イ、3(6)ア、3(6)イ】
グリーンバンクの役割	グリーンバンクの役割、位置づけをはっきりさせることが重要。	緑化推進の母体としてのグリーンバンクの役割を明確にする。
市町の役割	市町がグリーンバンクの支店となっているが、レベルには差はないか？市町担当者の育成にも力を入れるべき。	緑化推進の母体としてのグリーンバンクの役割と支店となっている市町の役割を明確にし、地域緑化の推進役である市町担当者のレベルアップを図っていく。